

図書館だより



アナログ的楽しみのすすめ

情報メディア学科長
森 博 教授



東京地方では、エフエム東京などの民放5社共同で、現在の FM 放送より高い音質で、画像も送れる「デジタルラジオ放送」を来年4月から始めるそうだ。名古屋でも 2008 年までに本放送が始まるらしい。テレビの完全デジタル化が目前にせまり、インターネットの普及で広告収入も減少傾向にあるラジオ業界としては、いわば背水の陣なのであろう。日頃のライバルと一緒に、5年も前倒して本放送にふみきよう。世はまさに「デジタル」時代なのであるが、放送業界では最も「アナログ」的存在であると思っていたラジオまで、こんなに早く、デジタル化するというのは驚きであった。

ところで、「デジタル化」の最大のメリットは何であろうか。私は、「便利さ」であると思う。レコードが CD に代わったとき、CD の音質の良さに驚き、iPod シャッフルのような音楽プレーヤーの登場では、その小ささと軽さに感心させられた。最近の「デジカメ」の小ささ、薄さ、多機能さは、まさにあきれるほどである。これらさまざまなデジタル商品に共通のキーワードは、ずばり「便利さ」である。レコード、カメラ、テレビ、ラジオなど、我々の身の回りの品々はすべて「アナログ」であったのが、CD の登場あたりから、「デジタル化」の波が打ち寄せ、最近では、「デジタル家電」といった言葉まであらわれたように、今や怒濤の快進撃である。とにかく、便利なのである。映像も音声も文字もすべて「1」と「0」だけで表せるのだから、記憶媒体に関係なく、全部同じ土俵で扱える。極端な話、巨大な記憶媒体を内蔵したケータイが1台あれば、音楽も写真も動画も全部それに入れて持ち運べる。デジタルチューナーを内蔵しておけばデジタルテレビもデジタルラジオも視聴したり録画録音が自由自在。ちょっと前までは夢物語のようなことが「デジタル化」の恩恵で、いとも簡単に実現しそうな雰囲気である。



さて、このような「デジタル化」の波は、今後も無敵であろうか。私はちょっと待てよと思う。たしかに、「デジタル化」は便利で、たぶん、今後もこの勢いは止まらないであろう。しかし、何かが違うのではないか。うまく言葉で表せないが、「デジタルの世界」は、「便利」ではあるが「浅い」のだ。別の言葉でいうと「深い満足感」が得られない、「心地よさ」が伝わってこないのだ。これは多分にデジタル機器の熟成度不足が原因であろう。デジカメを例にとってみても、最新のデジタル一眼レフは、良く写し便利

だからプロのカメラマンでさえ、続々とデジタルに移行しているが、それは仕事に便利だからである。我々しろとが、それらを実際に手にとってファインダーを覗いたり、シャッターを切ってみると何かしっくりこない。プリントしてみてもしかりである。「アナログ一眼レフ」に良く似せているけど、やはり、何かが違うのだ。数値上はたいした違いはなくても、感覚的には大きい。我々の感性は、つくづく「アナログ」なんだなと感心してしまう。



この問題は、時間がたてば解決する問題なのかもしれないが、もしかすると本質的に解決できない問題なのかもしれない。人類がこれまで脈々と築いてきた「アナログ」的文化は、そう簡単には「完全デジタル化」できないのではないだろうか。そこで、私からの提案なのであるが、「デジタル化」の便利さはしっかりと享受しながら、あえて積極的に「アナログ」に浸ってみてはどうだろう。わざわざ、フィルムを使うカメラで写真を撮ってみる、デジタル化された音や映像を楽しむだけでなく、実際にライブやコンサートに足を運んでみる、ネットだけに頼らず、本屋や図書館に行き必要な情報を手に入れてみると言った具合にである。そのような「アナログ的楽しみ」を十分に知った上で、「デジタル的便利さ」を使いこなすことが大切なのではないだろうか。私は、個人や企業が「デジタル情報社会」を賢く生き抜くためのキーワードは「心地よさ」と確信している。「便利さ」が一番ではない。この「心地よさ」という感覚を、自分の体中に、鋭敏なセンサーしてしっかりと働かせるには、どうすれば良いか。それは、どっぷりと「アナログ的な楽しみ」に浸ったライフスタイルを一度は経験してみるしかないと思う。「便利なデジタル」は横目でちらりと見て、いったん無視するのである。そこは、ちょっと不便で、面倒な世界かもしれないけれど、どっぷり浸っているうちにいつしか「深い満足感」とか、「真の心地よさ」とは、どのようなものか自然にわかってくるはずである。その何ともいえない「心地よさ」をじっくり味わってから、便利で快適な「デジタル情報社会」にゆっくりと足を踏み入れていっても、決して遅くはないと思うのだがいかがだろう。あなたが、もし、デジタルの便利な世界にしか、興味を感じていないかもしれないなら、だまされたと思って、ぜひ一度試していただきたい。

目次

アナログ的楽しみのすすめ	1
学内ルポ	2
本の紹介	3
図書情報センターから	4



名古屋文理大学 コーラスサークル 稲沢まつりに参加！



名古屋文理大学のコーラスサークルは2004年7月に当時の情報文化学科1年生6人によって作られました。その後、メンバー交代を経て1年余り、顧問の山住富也先生と吉田友敬先生のご指導の下、ゴスペルやアカペラを中心に練習を続けています。今回の『図書だより』誌上では、これまでの活動を振り返るとともに、今年度最初のイベントである稲沢まつりステージにみなさんをお誘いしたいと思います。

(撮影：小橋一秀 取材：田中明子)

活動報告

2004年10月 稲沢まつり出演 (稲沢市民会館)

名古屋ゴスペルシンガーズの応援を得たステージは、会場のお客さんも一緒にステップを踏んでくださるほど盛り上がりしました。

2004年10月 稲友祭出演 (中庭屋外ステージ)

伴奏の林けい子先生の応援を得て、初めて部員だけのハーモニーをご披露しました。

2004年12月 名古屋ゴスペルシンガーズのコンサートに出演(愛知県芸術劇場コンサートホール)

300人ものゴスペルシンガーズと共に、初めて本格的なコンサートを経験しました。

2005年も稲沢まつり(10月22日)に出演します！

練習風景

体育館1F ラウンジにて



コーラス部には今年もたくさんの1年生が入部しました。撮影の日も稲沢まつりのステージのために、1年生部員が：

- | | |
|----------------|---------------------|
| 1. 世界に一つだけの花 | 2. 島唄 |
| 3. 見上げてごらん夜の星を | 4. We are the world |

を練習しました。

お昼休みにラウンジから歌声が聞こえてきたら遊びに来てくださいね。

稲沢まつりのステージにもぜひお越しください

10/22(土) 13:00~13:30 稲沢市民会館 小ホール

健康栄養学科「健やかワールド in 稲沢」内のステージです

ピアノ： 増田 美由紀 先生(名古屋ゴスペルシンガーズ)

賛助出演： 名古屋ゴスペルシンガーズ(一宮ゴスペルラバーズ)

進行： 吉田 友敬 先生

コーラスサークルへのお問い合わせは、山住(111 研究室)、吉田(31 研究室)、田中(119 研究室)まで。

★本の紹介★



『戦争のつくりかた』

りぼんぷろじえくと
りぼんぷろじえくと 2004年

紹介者: 社会情報学科 1204012 安藤 信一



この本は、すでに施行されている法律や法令、審議中の有事関連法案（2004年6月7日現在）や国会答弁の内容などを踏まえて書かれた本であり、決して戦争を始めるにはどうしたらいいかという内容ではありません。今年は戦後60年目にあたり、戦争の悲惨さ、平和の大切さについて今まで以上に考えていかなければいけない年だと思います。

平和の大切さを考える上で欠かすことのできないのがこの本ではないかと思います。

内容を簡単に紹介すると、もし自衛隊法や国民保護法、特定公共施設利用法などが成立し、日本が戦争のできる仕組みを持つようになったとき、日本がどうなっていくのかが書かれています。

“自衛隊が武器を持って海外へ行くようになり、攻められそうになったら、さきにこっちから攻めるということが言えるようになります。

戦争のことは、ほんの何人かの政府の人たちで決めていい、というルールを作り、ほかの人たちには「戦争することにしたよ。」といいます。時間がなければ後回しになります。

政府が、戦争する、するかもしれない、と決めると、テレビやラジオや新聞は、政府が発表したとおりのことを言うようになり、政府にとって都合が悪いことは言わない、というルールがつけられます。・・・”

これでは、戦争をしていた60年前の日本に逆戻りです。

僕は高校時代、少しだけですが、平和活動のようなことをし、戦争体験者の話を聞いたり、岐阜の平和資料室や京都の立命館大学国際平和ミュージアムなどへ行き、戦争中のことも勉強をしました。

もちろん僕は、戦争を知らない世代の人間です。話を聞いたり資料を見ただけでは戦争の本当の悲惨さはわかりません。

しかし、平和を願うことはできます。

この本は、戦争の惨さや平和の大切さが実感できる本です。

“わたしたちは、未来をつくりだすことができます。

戦争をしない方法を、えらびとることも。”

最終ページより

（編集者注）Web版の利用が出来ます。 URL <http://www.ribbon-project.jp/book/>

原稿
募集

書籍・人物紹介

『図書館だより』では、読者の皆様からの原稿を随時募集しています。1ページ全体に掲載をご希望の方は1000～1300字、半ページに掲載をご希望の方は400～500字が大体の目安となります。内容の前部分に、
名前 所属学科 学生の方は学籍番号
本の標題 著者名 出版社名 出版年
を明記し、文書を保存されたフロッピーまたは印刷された用紙を、図書館カウンター（内線：362）までお持ちください。採用された方には粗品を差し上げます。たくさんのご応募をお待ちしています。

エッセイなど

原稿
募集

図書情報センターから

南館 2F の実習室の利用について

この9月から南館2Fのマルチメディア工房とプリント工房の利用方法が変更されました。利用申請の受付と鍵の貸出しは図書館カウンターで行います。カウンターのマルチメディア工房・プリント工房使用届に必要事項を記入し、学生証を添え申し出てください。また南館2Fの第22情報研究室で行っていたオープン実習室のプリンター用紙の対応なども今後は図書館カウンターで対応します。

マルチメディア工房・プリント工房の利用可能時間は情報実習室同様、9時30分～16時30分(N パソコン室のみ16時00分まで)です。時間外の利用については課外活動・演習担当等の教職員に相談してください。

新・マルチメディア工房のご案内

この4月にマルチメディア工房の機器が拡充されました。3DCG 製作や立体撮影用のシステム、特殊撮影用スタジオを備え、他の情報実習室とは一味違ったより高度なレベルの作品の製作が可能になりました。マルチメディア工房のシステムやパソコンの利用方法については、図書情報センターの担当者までお問い合わせください。また事前に相談いただければ初歩的な利用ガイドをしますのでご連絡ください。



モーションキャプチャシステム:

2台のカメラを用い、動画像を立体撮影します。

専用のソフトウェアで、動画像中の演技者の身体部位の動作を追跡し、3DCG などのキャラクターの動作に反映します。



ビデオキャプチャ&編集システム:
様々な機材、メディアから動画をパソコンに取り込むシステムです。
録画・撮影した動画からオリジナルのDVDなどが作成できます。



立体液晶ディスプレイ:
立体撮影した画像を、特殊なメガネ等を用いずに、直接立体表示可能なディスプレイです。



特撮スタジオ
です。

左から、照明装置・合成撮影用スクリーン・ビデオエフェクタ・撮影カメラ&モニタ

平成17年10月

編集：名古屋文理大学図書情報委員会

発行：名古屋文理大学図書情報センター

〒492-8520 稲沢市稲沢町前田 365

TEL : 0587(23)2400 FAX : 0587(21)2844

e-mail : toshokan@nagoya-bunri.ac.jp